研究経過報告

二　宮　克　美

本教室の助手として着任して以来，既に半年の月日が流れた。しかし，この期間だけに限っての研究経過を報告することは難かしいので，今回は現在までの研究経過を簡単に報告することにする。

1. 個人研究について

児童の道徳的判断の発達について研究を進めてきているが，その成果はこれまでに次の2つの論文にまとめた。

「児童の道徳的判断における意図の認知とモデリングの効果について」　教育心理学研究　第27巻　1－10　1979年3月

「児童の道徳的判断に関する一研究：Gutkin の4段階説の実験的検討」　教育心理学研究　第28巻　18－27　1980年3月

現在，Gutkin の提起した4段階の者の特質を明らかにするとともに，道徳的判断の発達に関連する諸要因の検討を目ざしているが，この点について既に次の論文をまとめた。

「児童の道徳的判断に及ぼす意図と結果の情報提示順序の効果」（教育心理学研究第29巻に掲載予定）

これに続くものとして，現在,「児童の道徳的判断に関する一研究：自己の行為の判断と他者の行為の判断との比較」をまとめている。また，8月に日本心理学会第44回大会で「児童の道徳的判断に関する一研究：道徳的判断の一指標としての反応潜時の検討」を，10月に日本教育心理学会第22回総会で「児童の道徳的判断に関する一研究：「嘘」についての道徳的判断の発達」を発表した。

今後の研究課題として，「過失」「嘘」に続いて「盗み」を主題とする例話におけるGutkin の4段階の検討を考えている。また，道徳的判断の発達と prosocial behavior との関連もできれば検討したいと考えている。

2. 共同研究について

青年期の社会的態度の発達と変容の過程を検討するため，数年前から久世敏雄教授の指導のもとに縦断的調査研究に参加してきた。その研究成果は，これまで本紀要に逐時報告されてきたが，今回も「中学生・高校生の社会的態度に関する縦断的研究（Ⅱ）」としてまとめられている。現在，資料収集もほぼ終結し，総括的な検討を残す段階に入ってきている。

その他，名古屋大学教養部八重島建二教授の指導のもとで，椙山女学園大学の大野木裕明ならびに本学大学院生小田侯朗とともに，Yando et al.（1978）の提起した模倣における2要因理論を検討した。その結果は，8月の日本心理学会第44回大会で,「児童の遊びとモデルの示範：Yando らの2要因理論の一検討」と題して発表した。これは，なるべく早い機会に論文としてまとめる予定である。

名古屋大学教育学部臨床心理相談室昭和54年度活動報告

Ⅰ．昭和54年度の新規受理件数

昨年度の新規受付ケースは計70例であり，その年齢ならびに件数は，表1に示すとおりである。年齢面では，就学前のものが，約54％をしめるのに対し，中学生以上は約23％であり，青年期以降のケースに比して，幼児・児童が多いのは，前年度までと同様の傾向にある。

このインテーク，70ケースという数字は，相談室開設以来，52年度の71ケースに次ぐものである。しかし，実をいえば，この数値の大半は，10月までのおおよそ上半期の間ですでに到達され，この時点で部屋とスタッフともに当相談室のキャパシティを越えてしまったために，それ以降，新規受付はやむなく，原則として中止，新年度にまで延期されたのである。ただし，プレイルームや並行治療を要しない青年期以降のケースや特別な事情のあるものは別とされたので，11月以降にも若干数は受付けられている。上記の数値は，このような事情の結果によるものであり，54年度の相談申込みが急激に増加したことは確かである。

その理由のひとつとしては，当相談室に関連した記事がいくつかの新聞にあいついで載せられたことにもあるが，ともかく，このように「（外に向けての）地域サービス」の面での要請が充実してくることは，同時に他方の「（内に向けての）教育・訓練，さらには研究」の側面を充実させることへの刺激ともなるものであり，われわれとしては，社会的責任の重さとともに「やりがい」を感

表1 54年度新規受理件数

年齢／性	就学前 0～3	就学前 4～6	小学生 低学年 7～9	小学生 高学年 10～12	中学生 13～15	高校生 16～18	大学生・成人 19～		計
男	12	16	9	3	2	2	0	5	49
女	2	8	3	1	0	3	0	4	21
計	14	24	12	4	2	5	0	9	70

表2 54年度受付ケースの受理面接時の処遇状況

個人カウンセリング	10
母子併行治療	36
親のカウンセリング	2
M・Rグループ療育	5
集団遊戯療法	2
ガイダンス	11
他機関紹介	4
計	70

表3 54年度受付ケースの問題内容

自閉（傾向）児	15
発達，言語の問題	12
情緒的問題	7
精神発達遅滞	12
登園・登校拒否	10
青年期危機的問題	4
神経症，精神病	7
その他	1
計	70

じさせられるものともなった。

これら受付ケースの問題内容と処偶状況は，それぞれ表2と表3に示すとおりである。両者ともに従来の傾向と大きな相違はみられない。

Ⅱ．継続中のケースについて

現在，継続中のケースは，54年度末の時点で眺めてみると，表4および表5から明らかなように，53年度以前受付の継続中と観察中の42ケース，及び54年度受付の継続中と観察中の36ケース，計78ケースになる。

これら継続中のケースの大半は，毎週1回1時間，母子並行治療の場合には，同時に2人の治療者により，2つの部屋を用いて，扱われる。こうしたルティーンの活動のほかに，上に述べたインテークや経過観察のケースが入ってくるのであるから，治療予定表はきわめて過密なものとなっている。少くとも，部屋は決定的に足りない。これらルティーンやインテークの時間は，ケースと

表4 53年度以前に受付けたケース 54年度末における処遇状況

処遇状況＼受付年度	45	47	49	50	51	52	53	計
治療継続中	2	1	1	3	5	8	11	31
54年度に終結	0	0	3	3	5	17	7	35
54年度に中断	0	1	0	1	1	3	2	8
経過観察中	0	0	2	0	1	8	0	11

表5 54年度受付ケースの54年度末時点での処遇状況

54年度末時点での処遇	件数
治療継続中	34
ガイダンス	11
経過観察中	2
終結	8
中断	8
他機関紹介	7
計	70

スタッフの都合によって，1週間のあらゆる時間に均一に散らばるはずもなく，曜日と時間によっては，相談者のために用いうる正規の4室（第1，第2プレイルーム，面接室，心理検査室）のほかに，田畑研究室，池田研究室，第7実験室，第3心理演習室，さらには院生室までもが同時に使用されるようなこともあるのであり，最低限，あと2つの面接室の確保が是非とも要求されるところである。

隔週金曜日の夜に行われているケース・カンファレンスにおいては，下半期に先に述べた理由でインテーク・ケースが非常に少くなったため，その分だけ継続中のケースに関して，じっくり検討する時間がとれたのは収獲であった。

Ⅲ．リサーチ・カンファレンスについて

54年度から，ケース・カンファレンスとならんで，これと交互に隔週でリサーチ・カンファレンスが行われている。ケース・カンファレンスは，秘守義務の原則上，クローズド・システムがとられ，参加はスタッフだけに限定されているが，リサーチ・カンファレンスは，日頃

表6　54年度リサーチ・カンファレンス主題一覧

	月　日	主　　題	話題提供者
1	昭和54年 5月25日	境界例について	加藤雄一 (総合保健体育科学センター)
2	6月8日	自閉症研究グループの現況	蔭山英順 後藤秀爾 丸井文男
3	6月22日	UFOに夢中であった一登校拒否中学生一思春期症例における母親カウンセリングを通しての接近一	田畑　治
4	7月20日	家族とつきあうということ 一ごく最近の症例をとおして一	村上英治
5	10月19日	グループ・アプローチをめぐって	安藤延男 (九州大学)
6	11月9日	分裂病概念をめぐって 一とくに人間学の立場から一	池田博和
7	12月7日	情緒障害と自閉症の診断をめぐって一対人関係発達過程の観点から一	譲　西賢
8	12月21日	Cross Cultural Counseling 一文化のはざまに生きる人の理解と援助関係に必要な文化的視点一	星野　命 (国際キリスト教大学)
9	昭和55年 2月1日	攻撃性の著しい自閉児の治療をめぐって一鑑別診断と治療を中心に一	後藤秀爾 丸井文男
10	2月15日	思春期妄想症（自己臭）の事例の治療過程	伊藤義美
11	2月29日	夢を記録しつづけた青年	生越達美

の実践におけるわれわれの体験をいったん対象化し，体系化，理論化，あるいは普遍化，公共化しようとする方向において，スタッフの資質をたかめようとするものであるから，発表するものも聴く例もオープンにされ，スタッフだけに限られてはいない。話題提供者としては，機会のあるたびごとに，その面に経験の深い先人たちを招いて，刺激を受けるとともに，内部からも積極的に，その都度の知見をまとめて提起するようすすめられている。

54年度にはリサーチ・カンファレンスは，計11回行われた。話題提供者と主題の一覧は表6のとおりである。

われわれは，このケース・カンファレンスとリサーチ・カンファレンスを両輪として，今後とも一層の研鑽に努力を重ねていきたいと考えている。

（村上英治・池田博和）